





体の弱い夫の病気がここ最近で悪化してしまい、
私は危険を承知で魔族街ヴァルビアに薬を求めてやってきた。

森暮らしてお金のない私は店主に足元を見られてしまい、
言われるがまま仕事の斡旋を受けたのだが――

「お、かわいいエルフのネーちゃんいるじゃねーか」
「マジかこいつ、外でこんな格好して頭おかしいんじゃないか」

「……………S、さんじゃ…まか……………」

紹介された仕事は風俗嬢として魔族の慰みモノになることだった。
別の仕事を何度お願いしても、この街で他に仕事はないと言われ、
私は仕方なくその場で承諾してしまった――

抵抗も無駄に終わり裸にむかされた私は、店の前を
通るオーク達の見世物にされていた――




「てか、ネーちゃんニ発いくらよ……ああん？50デブ!?」
「やつすwwこんなはした金でお前、股開いてんのかww」
「どうせ頭下ごるか病気持ちか、使い古しの中古クス便器だろ」

「…そんな…(私だってやりたくてやってるわけじゃないの)っ…」

罵られて折れそうになる心に、ふと天の顔がよぎる。
羞恥心でふるえる体をキュッとおさえつけ、何度も覚え
させられた下品な言葉で、オーク達を店内に誘導する。





「…お、お客様…私は病気はもっておりませんし、
お、おマ、おマンコの方も…中古ではありますが、経験は夫のみで
ございます…よろしければ店内にて、淫乱エルフのち、臆入り、
お試しになつていかれますか…?」

「ハハハハwwそこまでお願いされちゃあ仕方ねえな、
おい、今日はいい感じじゃあか」
「ふん…まあ便器についてはちょっといいかな」

「…あ、ありがとうございます…私の中ロ子宮に、たくさん…
ザーメン…排泄していただけたらな…♡」



「ひゃあっ♡♡これは、違うの…♡欲しがってなんか、あうんっ♡…ない…からあ…!」

「子宮は俺のチンポと生キツスしたがってんか! どうなんだこの淫乱メス豚エルフがあ!」

「いやあだめえ! 子宮降りちやダメえ! ザーメンいやっ オークの子供いやあっ♡♡」

「うるせえっ…おろ!」発目くゝんっ…おおおおっ…



アッアッアッアッアッアッアッ

「ああああああっ…ダメっ出てるっ中っ出てるっ… 妊娠しちゃっ…あっ♡あっ♡あああっ♡」



「中古便器の割にはけっこう楽しめたな」
「そっだな、んじや仲間呼んで今からまた輪姦そっせ」

「えっ…そんな、休ませて、お…お願いします…っ」

「お前、自分の値段知らないだろ、相場のたったの1/10だぜ」

「…えっ…1/10ってどういう…うそ…そんなっ…」

「たくさん稼がないといけないんだろお…協力してやるぜ…」

「…いやっ無理です…いやっ、いやああああっっ」



